

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：32693

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25862125

研究課題名(和文) 新人看護師の臨床実践能力獲得をめざした学習支援システム構築に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Fundamental Research on Learning Support System for New Graduated Nurses to Promote Ability of Nursing Practice

研究代表者

西田 朋子(NISHIDA, TOMOKO)

日本赤十字看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：20386791

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：臨床現場の看護職との協働により、現任教育で有用性の高いeラーニング教材の開発を行い学習成果を明らかにした。プロジェクトメンバーで「手洗い」「点滴作成」の教材作成をした。メンバーの体験としては、現場の看護を振り返りながら活用可能な教材を考える、自身が新人時代の困った経験を振り返る、日頃の看護実践を振り返り、確実な方法との照らし合わせを行う、教える側の意識や行動を見直す必要性に気づく、等だった。教材は高評価だったが、eラーニングだけで行う限界も明らかになり、ブレンディッドラーニングを基盤にした教育提供や新人看護師の学習スタイルを活かした学習支援システムの構築が重要であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：Aim of this study was to clarify about learning outcomes e-learning materials in-service education for new graduated nurses. The e-learning materials were develop of in cooperation with the nursing staff of the clinical site. Project member developed materials of "hand-wash", "drip creation". Member's experience was Reviewing the nursing practice Consider the possible use of teaching materials while reviewing the nursing of daily To look back on the experience with troubled rookie era of site, perform the adjustment in light of a reliable method Notice to the need to review the consciousness and behavior of the side to teach . Teaching materials, but was a high evaluation, limit also becomes clear that carried out in the only e-learning, it has been suggested the construction of learning support systems that take advantage of the learning style of education provided and rookie nurse in which the blended- learning in the foundation was important.

研究分野：看護教育学

キーワード：新人看護師 eラーニング 教材作成 学習支援システム

## 1. 研究開始当初の背景

日本の医療環境が高度化かつ複雑化する中、医療・看護の質の確保は不可欠であり、看護師にはより高い臨床実践能力が求められている。しかし、新人看護師（以下、新人）は、看護技術や対人援助形成技術が未熟であることが指摘されており、約9%の新人が就職後1年以内に離職する。2010年4月からは新人看護職員研修制度が努力義務化され、新人を受け入れる各医療機関では、新人の臨床実践能力を向上させるために様々な研修機会が確保されている。

臨床実践能力は、「看護職員として必要な基本姿勢と態度」「技術的側面」「看護技術を支える要素」「管理的側面」の要素から構成され、各々が独立したものではなく、患者への看護ケアを通して統合されるべきである<sup>1)</sup>。つまり、臨床の場では“看護技術を手順に従い正確に実施する”ことだけではなく、“病棟の環境、物品の位置などを考慮し、患者への声かけから使用物品の片づけまでの一連の行為を含めて看護ケアを実践する”ことが重要となる。研究者が行った新人支援に関する研究<sup>2)</sup>では、実践に関する自信がつくと職場にも慣れていくことが明らかになっているが、新人の看護実践の具体的な現象では、【知識を実践場面に応用できない】、【苦手な実践であるため自分の行動にしか目が向かない】等の状況も明らかになった<sup>3)</sup>。これまでの研究成果から、現任教育での強化が必要とされる臨床実践能力に必要な要素を統合した内容を学習できる学習支援システムの構築は急務であると考えられる。しかしながら、臨床実践能力を獲得するための、現任教育における有用かつ効果的な学習支援システムは未だ構築されておらず、臨床現場に即した教材開発も十分に組み込まれていないことから、本研究の着想に至った。

臨床実践能力の核となる看護技術の獲得には、モデルとなる実践例を視覚的に繰り返し見てイメージ化をはかることや反復練習が必要であり、なかでも映像によるイメージ化は認知を促進し、学習結果の強化、学習への転移や保持を容易にする<sup>4)</sup>。学習結果の強化あるいはフィードバックでは、モデルとなる実践例との比較による実践の自己評価、他者評価が欠かせないため、自己の実践と比較することができる視聴覚教材は効果的である。モデルとなる実践例を繰り返し視聴でき

る教材の代表例は、DVDである。ところが多くのDVD教材は看護基礎教育を対象に開発されているためか、臨床実践能力の要素が統合された内容の作成には至っていない。また、必要な知識が同時に学習でき、実践面のアプローチが可能な視覚教材は非常に数少ない。

さらに、能動的に学びたいときに学ぶことができる機会が、イメージ化を図り、実践への効力感を高めるうえでは不可欠であるものの、学習環境の整備は不十分である。そこで、学習者主体の学習機会の設定、効果的な教育の実施、つまり双方向型の教授学習支援が可能となるIT活用教育<sup>5)</sup>の一方略としてのeラーニングが、現任教育では有用であると考えられる。そのためeラーニングで運用可能、かつ現任教育で有用な教材の開発が必須である。eラーニングの学習環境をデザインする際には、eラーニングでもたらされる独自のメリットのみならず、これまでの教育で蓄えられた様々なノウハウを一要素として組み入れてトータルにデザインするのがよい<sup>6)</sup>。したがって、これまでに開発された教材の長所を包含し、さらにeラーニングに適している、臨床実践能力を向上させる教材を開発することが不可欠である。

加えて、現任教育の内容や方法は、管理者や先輩看護師が構築してきたケースがほとんどである。新人のOJTは、オリエンテーションのような教育指導よりも、責任を伴う形での業務付与・権限委譲が重要<sup>7)</sup>であるが、こうした性質を持ち合わせた新人のOJTに活用可能な教材は見当たらない。そこで新人を巻き込み、経験年数豊かな看護師と研究者が協同して教材作成にあたることで、当事者が体験している困難や学習ニーズ、斬新なアイデアを組み込んだ教材を開発できる可能性が高く、さらに教材として先輩看護師の実践知が共有されることで、有用性が高いeラーニングを用いた現任教育での教材を効果的に開発することが可能となる。先輩看護師の実践知を活用することは、既存の知識を活用し新たな知識創造をすることとなり<sup>8)</sup>、組織の目標、ひいては看護職全体の臨床実践能力の向上に寄与するといえる。

- 1) 厚生労働省(2004). 新人看護職員の臨床実践能力の向上に関する検討会 報告書.
- 2) 西田朋子(2010). 医療現場における新

人の支援、2009 年度日本赤十字看護大学大学院看護学研究科博士論文、2010。

3) 西田朋子(2006)．看護系大学卒業直後の看護師が行う看護実践 - 臨床判断および医療チームでの看護実践に焦点をあてて -、日本看護学教育学会誌、16(2)、1-12。

4) 藤岡完治(1994)．看護教員のための授業設計ワークブック．医学書院。

5) 内閣 高度戦略情報通信ネットワーク社会推進戦略本部(2006)．IT 新改革戦略 答申。

6) 鈴木克明(2004)．eLF テキスト <http://www2.gsis.kumamoto-u.ac.jp/eLF/text/part2.pdf>

7) 榊原國城(2004)．職務遂行能力自己評価に与える OJT の効果．産業・組織心理学研究 18(1)．23-31。

8) 大串正樹(2007)．ナレッジマネジメント．医学書院。

## 2. 研究の目的

現場と協同して e ラーニングを用いた現任教育での有用性が高い教材開発を行い、その学習効果を明らかにする。

## 3. 研究の方法

### (1) 文献検討

日本の看護教育における e ラーニングの動向に関する文献研究を行った。

データ収集方法：医中誌 Web (Ver.5) を使用し、開始年は限定せずに 2013 年 5 月までに掲載された文献を対象に「e ラーニング」をキーワードとして検索した。論文の種類を原著論文と総説に限定し、さらに看護に限定、そのうち抄録が示されており、e ラーニングの対象が看護学生または看護職であることが確認できる文献を対象とした。書誌事項、抄録等から、発行年、e ラーニングの対象者等の観点から検索結果を整理した。

(2) プロジェクトチームの発足と教材選定  
調査期間：2013 年 11 月～2014 年 5 月。

研究参加者：本研究に賛同した 1 施設で、研究者を含む 10 名のメンバーのプロジェクトチームを発足し、1～2 回/月研究会を実施、現場で有用な e ラーニング教材内容の検討から、1 つの教材作成を行った。計 9 回のプロジェクトを実施した。

データ収集方法：各研究会終了時に、その日の検討で印象に残っていること、前回の研究会終了後、実践面で気づいたこと等をグループインタビューした。また、取組内容や様子も参与観察した。

分析方法：各回の取組内容やインタビュー内容からテーマを抽出するとともに、プロジェクトチームに参加した看護師の体験を見出した。

### (3) 作成した教材評価

研究デザイン：無記名自記式質問紙調査。調査期間：平成 27 年 4 月。

研究対象者：研究者と共に e ラーニング教材を作成した 1 医療施設の点滴作成に関する研修 (e ラーニングの後、演習をする研修) に参加した新人看護師 31 名。質問紙の構成：個人背景と学習経験 (2 項目) 演習に対する認識 (1 項目) 演習内容の到達度と実行可能性 (2 項目) 教材評価 (4 項目) 学習スタイル (7 項目) の全 16 項目。データ分析方法：SPSS Ver.22 を用いて各質問項目の記述統計量を算出した。

## 4. 研究成果

### (1) 文献検討

1. 文献の年次推移：該当した 109 件を年次別に分類した結果、初めの論文は 2000 年に発表されており、数年間は年間数件の発表があるのみであったが、2005 年頃より発表論文数が年間 10 件を超えるようになり、2012 年度には 18 件が発表されていた。

2. e ラーニングの対象者と内容：109 件中 94 件が教育用の e ラーニング教材の開発や評価に関するもの、10 件が e ラーニングを導入するために必要なデジタル機器や、インターネットの使用状況に関するもの、5 件が e ラーニングを活用した教育手法や、e ラーニングの利用状況に関する総説であった。教材の開発と評価に関する文献のうち、看護学生を対象にして作成されたもの (基礎教育) が 79 件、看護師を対象として作成されたもの (継続教育) が 15 件であった。教材内容は看護技術学習に関するものが 39 件 (基礎教育 35、継続教育 4)、講義に関するものが 4 件、看護記録・看護過程に関するものが 4 件であった。継続教育で対象が明らかにされている場合、最も対象とされていたのは新人看護師 (4 件) であった。

### (2) 教材開発プロセスとプロジェクトチームの看護師の体験

1. 研究参加者：3～6 年目の役職のない看護師 6 名、役職のある看護師 3 名の計 9 名。各回のグループインタビューにも参加。

2. 開発プロセスと看護師の体験：<> はプロセス、<> は体験である。7 回実施。1 回目：既存の e ラーニング教材視聴 - <視聴時間の検討> <教材使用目的の明確化> が重要であることが取り上げられ 現場の状況を振り返りながら活用可能な教材を考える 体験をしていた。2 回目：作成教材の検討 - <研修や先輩からは教わらないが経験だけであることが求められる技術> について メンバー自身が新人時代の経験の困った経験を振り返る 体験を通して浮かび上がった。これらが教材として有用であり具体的には点滴作成が取り上げられた。3～5 回

目：<ストーリー作成>と<撮影・画像見直し>では、自身の日頃の看護実践を振り返り、確実な方法との照らし合わせを行う体験をしていた。6~7回目：運用に向けての検討 - <指導にあたる先輩への普及の必要性> <集合研修での新人への適用> <客観的な教材評価指標の必要性> が話し合わせ、教える側の意識や行動を見直す必要性に気づく体験をしていた。これらの教材開発のプロセスとそれに伴う体験から、教材開発に携わることによって看護師にとっては学びがあることがある一方で、新人指導者側の課題も明らかになった。

### (3) 新人看護師による教材の評価

回収数：回収数(30：回収率96.7%)、有効回答率(28：有効回答率93.3%)  
教材評価：視聴覚教材を見て点滴作成について理解できたかどうかについては「理解できた(85.7%)」<sub>ⓧ</sub>、視聴時間の長さは「ちょうどよい(89.3%)」<sub>ⓧ</sub>、今後部署で行うときに視聴したいかは「思う(71.4%)」<sub>ⓧ</sub>だった。演習の到達度は「到達できた(88.9%)」<sub>ⓧ</sub>が最も高く、今後所属部署で点滴作成を「実際にできそう(67.9%)」「どちらともいえない(21.4%)」「できなそう(10.7%)」<sub>ⓧ</sub>、今回の研修で印象に残っている学習方法は「実技(61.5%)」<sub>ⓧ</sub>が最も多かった。学生時代の経験は「演習(71.9%)」<sub>ⓧ</sub>が最も多く、演習に臨むにあたっては「不安(55.2%)」「どちらともいえない(20.7%)」「楽しみ(24.1%)」<sub>ⓧ</sub>だった。学習スタイルの傾向に対して「はい」と回答した割合は「わからないことは自分から調べる(88.9%)」「調べ物は教科書などの書籍で行うことが多い(70.4%)」「調べ物はインターネットや電子辞書で行うことが多い(74.1%)」「空いている少しの時間に調べ物をする人が多い(60.7%)」「わからないことがある時にはすぐに調べたい(85.2%)」「わからないことがあってもそのままにしましまうことがある(53.6%)」「看護実践を行う前には必ず手順を調べてから実施する(60.7%)」<sub>ⓧ</sub>だった。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

1. 西田朋子、日本の看護教育におけるeラーニングの動向に関する文献研究、第33回日本看護科学学会学術集会、平成25年12月6日、大阪
2. 西田朋子、新人看護師に対するeラーニング教材開発の実践研究 - 開発プロセスとプロジェクトチームの看護師の体験、第34回日本看護科学学会学術集会、平成26年11月30日、名古屋

3. 西田朋子、新人看護師の臨床実践能力獲得をめざした学習支援システム構築に関する基礎的研究 - 新人看護師による教材の評価 -、第35回日本看護科学学会学術集会、平成27年12月6日、広島

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

西田朋子(NISHIDA TOMOKO)  
日本赤十字看護大学・看護学部・准教授  
研究者番号：20386791

(2) 研究分担者 なし  
( )

研究者番号：

(3) 連携研究者 なし  
( )

研究者番号：